



あま市美和・甚目寺歴史民俗資料館だより

ニューズレター

平成 25 年 3 月

No.003

編集・発行

美和歴史民俗資料館

(生涯学習課 文化振興係)

〒490-1292

愛知県あま市花正七反地 1

電話 (052) 442-8522



甚目寺観音裏手からみたかつての風景

画像提供 写真鈴屋

甚目寺小学校と漆部神社の境を南北に通る細い小道から真新しい尾陽病院をのぞむ。今、同じように線路の南に立ってあま市民病院（かつての尾陽病院）を探す、立ち並ぶ個人住宅、マンション、アパートによって遮られ、到底目視はできない。

昭和 40 年後半の風景を写し出した一枚と思われる。真新しいコンクリート製の病棟以外、周りは何も見当たらない。ちょうどこの新病棟建築以降、「町はハード（建物）の時代」を迎え、至る所で宅地化が進行し、子どもの数が増え続け、行政も毎年どこかの建物の竣工式を行い、またどこかで工事をはじめる時代の幕開けとなった。

提供いただいた写真はモノクロながらも、こげ茶色した木製の電柱といい、古いタイプの名鉄電車など、どこか懐かしさを物語る。

*資料館では昭和 40 年以降の市内で撮られた写真の収集をはじめました。何卒ご協力のほどを！

平成24年度 事業報告

〈1〉文化財の指定

10月22日市指定

無形民俗 下之森オコワ祭

〃 木田八剣社湯の花神事 以上2件



オコワ祭



湯の花神事

〈2〉企画展示会

期間	展示会名
5/28～6/30	第22回 ときのきねんび展
7/31～11/30	ちょっと昔のあま市展
10/28～12/2	あま市の芸能とまつり展
2/24～3/31	小六頭彰碑建つ ～正勝公頭彰碑建立の由来～

〈3〉歴史散策事業

実施日	内容
4/15	市西部の史跡と蓮華寺御開帳見学
5/8	下萱津周辺と天然記念物フジの見学
6/10	津島上街道走破1（新川橋～木田駅）
8/21	香の物祭見学と周辺散策
10/14	木田周辺と湯の花神事の見学
11/20	津島上街道走破2（木田駅～津島駅）
2/11	市南部の史跡とオコワ祭の見学
3/16	古文書解説講座 実地研修会

〈4〉水文化継承事業

実施日	内容
7/7	田んぼの学校
7/14	身近な川の水質調査
8/3	木曾川の生き物調査
8/17	まとめ&エコきつずサミット

対象は市内の小学生。本事業は宮田用土地改良区、国土交通省木曾川下流事務所の協力により実施。

〈5〉歴史講演会事業（テーマは萱津を説く）

実施日	演題	講師
11/18	ヤマトタケルと萱津	竹田繁良氏
12/2	中世の萱津を考える	蔭山誠一氏
12/16	萱津合戦について	加藤周二氏
2/2	萱津光明寺 遊行上人の御札配りについて	山本祐子氏
2/10	近世近代萱津の教育	浅井厚視氏

各時代における「萱津」について、その調査研究の成果を講演いただく。これまで見過ごされがちであった萱津の姿を、あるいは新たな一面を持つ萱津の姿を垣間見ることができた。

〈6〉検定事業（主催は実行委員会）

ジュニア検定

2月9日実施。受検者は市内中学生29名、同小学生72名であった。合格率42%。秋竹小6年生はほぼ全員、甚目寺小も多くの6年児童が難問にチャレンジして



くれた。本事業に際し、教育部長浅井厚視、石田正義両氏による出前授業を市内全校で実施する。

ものしり検定

2月24日通算で第3回目の実施となる。一般初級編を19名が受験し、今年は見事全員が合格した。また事前対策講習会を2月11日に行う。来年度以降も実施（ジュニア検定も）。一般向け検定は、初級編にプラス上級編も実施する。

〈7〉学習支援活動

昔のくらしと生活道具

収蔵品の中より当地域に関わり深い昔の生活道具を8～12点ほど学校へ持参し、3年生を対象に出前授業（1時限）を実施。市内9小学校で行い、3校は甚目寺資料館で実施する。



七宝焼発祥にかかわる謎 近代七宝のはじまり

あま市の伝統的工芸品として知られる七宝焼。この七宝焼は今から約180年前に、その原型が出来上がりましたが、いまだにわからない点がいくつか残っています。あま市七宝町を中心に作られる七宝焼のはじまりは天保3年(1833)海東郡服部村(現在の^{かじつねまち}中川区富田町服部)に住んでいた梶常吉が様々な試行を繰り返し制作に成功したものとされており、その後、梶常吉は頼まれて七宝焼制作の技術を何人かに伝えましたが、その時教えた相手から受け取った一札が今も残っています。

★一札に残る謎

現在残る一札のうちもっとも古いものは嘉永6年(1853)、市内下萱津に住んでいた吉村泰治という人から常吉本人に宛てて書かれたもので、下記のように、一子相伝を守って製造法を他人に漏らさないことを固く誓ったものでした。

差入申一札之事

一、今般貴殿御秘術之七宝焼仕法、御伝授被下置候、付而ハ同門中之規則堅相守、勿論一子相伝之儀ニ付、たとへ親類たり共、決而他言致間敷候、雖然右術致繁栄、国家之御為ニ而、無筋有之節ハ、前以貴殿江相届候上ニ而、伝授可致候、前条之趣於相背、如何様之御取計相成共、違背申間敷候、為後日証文、依而如件、
嘉永六丑年十二月 吉村泰治(印)
海東郡下萱津村 証人 友右衛門(印)
常吉殿

梶常吉は、その後も何人かに七宝の製造法を教え一札を受け取っていますが、これらには前の一札とは少し異なる部分があります。

一札

私儀七宝細工執心ニ付今度
右秘術御伝授被成下難有
奉存候尤右ハ一子相伝之外
たとへ親子兄弟たり共他
言等決而不仕勿論値段売
崩し申間敷候萬一聊ニ而茂
相背候儀等御座候節ハ加判
者迄相手取此証文を以何方
迄も御出所之上諸事御心儘
御取計可被下候其節一言之
違背申間敷為後証親類証人
役印一札仍而如件

丙安政三年

辰十月日

海東郡遠島村証文主

庄五郎(印)

同郡同村親類証人

光蔵(印)

同郡秋竹村口入証人

伊三郎(印)

同郡遠島村庄屋

重右衛門(印)

梶佐太郎殿

この一札は、遠島村(現在のあま市七宝町遠島)の林庄五郎が差し出したもので、林庄五郎は、この後当地に七宝焼制作の技術が広まるきっかけとなった人です。教えを受けた林庄五郎は、この一札の中で教わった方法を一子相伝以外他人には話さないこと、値段を崩さないことなどを誓っていますが、不思議なのはこの一札のあて先です。梶常吉ではなく、梶佐太郎という名前になっています。梶常吉には確かに佐太郎という後継者がいた記録が残っています。しかし、佐太郎は安政6年(1859)の生まれとなっていて、この一札が書かれた安政3年

▼林庄五郎翁顕彰碑(七宝町遠島地区、八幡社境内)



(1856)には生まれていないのです。それではなぜ、この一札の宛名は常吉ではなく生まれてもいない佐太郎になっているのでしょうか？

★梶佐太郎とは何者か？

これには様々な考え方がありますが、一つは、佐太郎は記録にある安政6年よりも先に生まれていたとするものです。現代と違って、生まれた子供が成長する前に病気等で亡くなるが多かったこの時代には、子供がある程度まで成長するのを見届けてから出生の届けをするために、この一札が書かれたときには既に佐太郎は生まれていたが、届出がすんでいなかったという考えです。七宝焼の創業家として梶家の将来にわたる繁栄を願っていた常吉は、あえて自分ではなく、幼い佐太郎あてに誓いを書かせた後々への保証を得たかった…ということです。

しかし、この考えを肯定するためには、もう一つ解決しなければならない問題があります。それは佐太郎とは常吉にとって何者だったのかということです。現在残っている梶家の資料の中に佐太郎が書いた『七宝焼の由来』という文書がありますが、その中に「梶常吉ハ我祖父ニシテ…」という記述がみられます。これをそのまま信じれば、佐太郎は常吉の子ではなくて、孫ということになります。たしかに享和3年(1803)生まれの常吉にとって、安政6年(1859)生まれとされる佐太郎が生まれたときは既に56歳、むしろ孫と考えた方が自然かもしれません。梶常吉には「いま」という名の娘がいたことがわかっており、佐太郎はその「いま」の子と考えることができます。ところが、この「梶いま」は弘化3年(1846)の生まれという記録があるので、「いま」は佐太郎を13歳のときに生んだこととなります。また、前記のように佐太郎が生まれた届けを遅らせていたとするならば、「いま」が佐太郎を生んだ年はもっと早くなり、この考えは少し無理があるようです。

このような疑問は昔から根強くあったらしく、かつて興味を持った地元の七宝業者が梶家のあった村の役場などに問い合わせたという話も残っています。

それを調べた人はどのような結論を導き出したかわかりませんが、百数十年前の出来事が今でも大きな謎のまま残っています。

(七宝焼アートヴィレッジ 小林弘昌)



梶常吉肖像

「縣外の縣人」 そうタイトルの付いた新聞切り抜きが、使い古しのノート1冊にびっしりと貼られた資料が今回紹介するそれ。スクラップブックといえいいでしょうか。旧蔵者は不明、初めに内容調査したのは平成2年、本資料の第一発見者である当時の古文書会S先生は概要を書き示す部分に「新聞切り抜き」とだけ記し、番号を付けないまま未整理段ボールへ戻された資料でした。確かに、その内容を確認しなければ、私も同じようなことをしたと思います。

ただその冒頭部分「國^{くに}廣^{ひろ}ければ人多し、本縣^{また}の如^{また}き亦^{また}大縣^{とほ}なるが故に、人材^{とほ}決して乏^{とほ}しからず、(中略) 縣外に出でて功成り名遂げんとしつつある縣人を紹介せんとす…」を読み、いつの時代の記事かすぐには分からなかったのですが、おもしろいじゃないか! と思い、ちょっとのつもりでその場にしゃがみこみ読み始め、結局、足が痺れて立つのが辛いほど必死に読んでる自分に気づくことに。こんなに夢中になるとは…、痺れる足を引きずりながら席に戻り、改めて読むと大正3から4年の記事であることがわかりました。

記事は名古屋市を除く犬山、一宮から丹羽郡、中島郡、海部郡^{あま}までを網羅^{もうら}しており、だいたい1郡6名~8名くらいの県外で活躍する県内出身者がピックアップされています。ではこの時代、どんな人物が偉人とされてきたのか本資料を通してみると、やはり一番多いのは軍人でした。丹羽郡楽田出身^{やしろ}の八代海軍中将にはじまり少将から大佐まで、各地方にたいてい一人、二人くらいは紹介されてい

ます。その次が実業家(本紙では成金^{なりきん}、金満家^{きんまんか}とも称す)で、あとは職種もまちまち。では肝心のこの地域(海部郡)の偉人^はは? 栄えある人物を一覧にすると、野口米二郎^{よねじろう}(津島市) 詩人、村井保(弥富市) 大型船の船長、高木益太郎^{ますたろう}(津島市) 実業家、水谷千代吉^{ちよきち}(愛西市) 軍人、陸軍大佐、篠田金^{きん}(あま市) 軍人、陸軍少将、伊藤萬太郎(あま市) 農務省役人、宮治民三郎^{たみさぶろう}(あま市) 軍人、海軍中佐、神田鐳蔵^{らいぞう}(蟹江町) 実業家、加藤高明^{たかあき}(愛西市) 政治家の8名でした。その内の3名があま市出身というのは嬉しいものです。順に紹介すると(原文要約)



篠田陸軍少将：海部郡出身者中軍人として最も成功したるは篠田金である。いずれの門閥にも属せず、それなのに畧進^{りやくしん}を重ね今日もなお膨湖島要塞司令官^{ぼうことうようさい}の要職^あに在りという。彼

は美和村篠田の服部幸八次男で幼名は金次郎と言う。しかし今は次郎を切り捨て「金(カネ: 実際はキと呼んだ)」の一字のみを取って名とした。幼より読書を好み、風呂焚きの間にも決して書物を手放さず。藁^{かまど}を竈^{かまど}に押込み、その炎で読書した。日露戦争では對州守備隊^{たいしゅう}にあってバルチック艦隊全滅に大いに貢献した。

伊藤萬太郎：農務省技師、保険に対する造詣^{こばしがた}深く、我が国の保険業界の中で重きを成す。美和村小橋方の出身、県立中学校を卒業し帝国大学に進み法科を出る。然れども決して坦々たる一路^{たんたん}を歩み得たものではなかった。刻苦^{こつくべんれい}勉励、中学時代



は少しばかりの米を郷里より仰ぎ、縣属則武方に居候をなし同家の雑役に服しつつ通学した。卒業後は地域の代用教員として働き、その真面目な働きぶりによって、愛育社の貸費学生とな

って帝国大学へ。大学卒業後は農商務省へ、保険の泰斗として知られ、イタリアで開催された万国保険会議の日本代表を務めたこともある。

宮治民三郎：海軍中佐、美和村森山出身、彼は幼より才能澁刺学業の成績はすこぶる良く、小学校時代より常に首位を占め陶生学校（津島にあった教員養成校）、中学と進む。上京し攻玉舎に入り在学1



か年にして明治27年江田島なる海軍兵学校に入った。同31年卒業、少尉より中尉に昇進、海軍大学に入り、卒業後海上生活をおくること数年、日露戦争には軍事偵察として上海に入り込み良く使命を果たした。戦後も海軍に奉職し今に及ぶ。彼は

今年で44歳、大佐に進むのも間もなく、その将来も揚々として多望に満つ。

最後に美和村に産せし3人物、ほとんど時を同じくして現れたるは、篠田小学校長吉田鉦一郎によるところが大きい…と解説される。

地域の出身者ならばきっと故郷に何か残っているのではないかと思ひ、彼らの生まれ故郷を探してみると、やはりありました。カーマホームセンター西側駐車場の一角、鉄柵で囲まれた場所に、篠田金が父親を偲んで建設した石碑をみつけ、また小橋方区の縣明社鳥居は伊藤萬太郎の寄進によるものでした。そして宮治民三郎ですが、こちらは兄弟で寄進した賽銭箱が神社にあったそうですが、残念ながら今は無いとのこと…、三人が三様の形で故郷に錦を飾っていたのです。

郷土とか地域の絆が薄れつつある世の中で、遠地にあっても故郷の恩を忘れずにいてくれたとは、なんとも心温まる話しです。この三氏のように、他県で名を成した郷土出身の偉人を見つけ出し、後世に伝え残すことも資料館の大切な職務であると思ひました。

（美和歴史民俗資料館 近藤博）

追加：宮治民三郎については、その外孫のひとりが文芸評論家の江藤淳で、その著書『一族再会』に、老齢ながらも気骨ある尾張人として、その人となりが描かれています

（協力）篠田金については服部昌郎氏にうかがった。

甚目寺歴史民俗資料館

開館時間	9：00～12：00、13：00～16：00
休館日	水曜日、木曜日
入場料	無料
交通	名鉄甚目寺駅より南に徒歩10分
駐車場	10台
電話	(052) 443-0145
住所	あま市甚目寺東大門8（甚目寺会館3階）

美和歴史民俗資料館

開館時間	9：00～16：00
休館日	水曜日、木曜日（6月は木曜のみ）
入場料	無料
交通	名鉄木田駅より北に徒歩10分
駐車場	20台
電話	(052) 442-8522
F A X	(052) 445-5735
住所	あま市花正七反地1

E-mail bunkashinko@city.ama.lg.jp

